

1919年(大正8年)[24歳]

「小池政美日誌」(7)

——1919年11月1～30日——

小池政美

悦につけ愁につけ静かに御前にひれ伏す時

彼も彼所に御恩恵深く祈りつつ

大いなる日を待ち給えるを讃めしめ給え

——1919年11月1～30日(第7巻)

事多き秋なる哉。

御心の事事に着々と行われ行く秋なる哉。

御恵の深く深く人間の心の奥底に染み行く秋なる哉。

特別に僕の小さな心を慰め給い

教え給え、悦ばせ給え、涙は心を洗わせ給う秋なる哉。

聖なる秋の夕。御名を畏るる清き乙女。

只感謝を続け奉らんのみ。

願わくば、おそろくは本年最後の巻ともなる可きこの巻をして

初めより終りまで謙遜なる心をもつて讃美の声をあげしめ給え。

雄々しくも世と戦いつつ十字架を負い行くを得しめ給え。

弱き意思を温かき心と特別に潔き精霊とに満たされて

ありし事をありのままに感謝せしめ給え。

尊き御名に於てこの感謝と祈とを御前に捧げまつる。アーメン。

——1919年11月4日(火)夜

○1919年11月1日(土)

お昼とほとんど同時に仕事をやめて——調査月報は終に今日も出しきれなかった——食事をおわると直ぐに中渋谷^{いさお}に行く。效^{いさお}さんは日土で留守。磯雄さん静枝さん勇さんは鎌倉へ昨日から泊まりがけで出掛け、おば様と嘉代ちゃんと丈で僕を待つて下さった。

色々の事を伺ったりお話したりした。正ちゃんの事も出た。お美喜さんの事も出た。君代さん方の事を伺った。6時すぎまで5時間近くの間、静かなお話が温かい心と心との間を幾度と無く往来した。嘉代ちゃんが僕の大学を出たのを祝して作つて下さった写真立と、今作りつつあるクッションとを下さるとおば様はおっしゃる。嘉代ちゃんにお礼を云つて僕にお祝を上げさせて下さいと願う。若しお約束が無ければ聖書を——特に英語のをと



約束する。おば様に特別にお話をする、おば様はお祝には注文がある、どうぞ聖書を特別に英語のを、おば様御自身30余年の前から読んで居る英語のが善親しいと云われる。僕と嘉代ちゃんの相談と全然一致して居るのも有難い。只一つ異うのは僕は名を書かずにさし上げたいと思つたが、おば様は名の外に何か書いてとのことであつた。よき辞を教えるのを待つつもりである。

6時半又お目にかかる可き折のあるのを思いつつお辞れする。嘉代ちゃんは外套をかけて下さった。激しい雨の中を東中野に急ぐ。

今日は佐伯さんも見えた。僕の今日の午後の事をしきりと心配して呉れた。様子を聞いて悦んで呉れた。聖書の事を話し、どうぞ佐伯さんとお美喜さんとが僕に贈らんという聖書を僕が嘉代ちゃんに贈るのと同じのにして下さいと頼んだ。雨の中を静かに帰る。僕にとっては幸な土曜日であつた。藤井先生に徴兵の事をお話する。

藤井先生、羅馬書第8章（第4） 但し利未記第2章。…〔講義内容の要旨、省略〕。

○1919年11月2日（日）

お湯に入つて好き日曜の午前をすごす。武田のおば様が若し見えたら御一緒に大手町へと心待ちにお待ちして居たが終にいらつしやらなかった。母様と御一緒に大手町へ行く。

藤井先生「末世觀の確実」

内村先生「十誡第7条」

お話を伺つて居らつしやる間の母様の態度が苦になつてならない。小なる信仰の結果かも知れない。小野先生にかけた悲を又ここに繰り返さないのかも知れない。否々基督の悲を少しは味わえとすすめ給ひし御恩恵かも知れない。何れよせよ、苦き苦き盃である。御心ならば是をも吞ましめ給えである。

高島さんのおば様と嘉代ちゃんとお目にかかった。母様はおば様は神田さんのおば様と同じく人を下に見なざる癖だといわれる。嘉代子さんはいい方だといわれる。人をほめたりけなしたりする権能は母様には無い。Vengeance is mein!〔復讐するは我にあり〕とは誰のお辞であるか。

西片町へ伺う。おば様の御病氣御見舞にである。大変よろしいという事であつた。谷田部太郎氏の川崎造船所に於ける職工との生活状態を聞いたり、正ちゃんの煙草を吞むのを見て驚いたり、僕としてはあらずもがなの訪問であつた。是から出来ることなら余り伺わぬ事である。早く佐伯さんが家を持つ事、東京の郊外に持つ事、及そしたら日曜の夜毎僕は訪問する事等話しながら帰る。僕は佐伯さんのためにお美喜さんのためにも早く其の日が来ればよいにと思う。二人のために云えば二人を僕が兵営に行くまでに呼ぶ事は色々の周囲の事情を考えてやめと決定した。

日記が大変貯つたので忙わしく筆を動かしつつ日曜の静かな夜を更かした。



……〔藤井先生と内村先生の講義の要旨省略〕……

○1919年11月3日(月)

17日の朝である。丁度2週間おくれてしまった。急がねばならない。

西村を東京駅に送り、急いで教文館に行く。よき聖書ありやと思つてである。しかし茲によきものはなかった。僕はMyersのSt.Paulを求めて丸善へ帰る。丸善に非常によいのがあった。是は字は少しこまかいけれども本当に好ましい出来であった。嘉代ちゃんの気に入る事を願つて求めた。帰つて見ると谷口が僕を待つて居た。一緒に歩こうという。小一時間歩んだ。彼はしきりに頭脳の破産を語つて居た。僕の兵営行を一般人通りの観方から見て居た。大変だねといった。僕の仕事を面白いかと聞いた。彼の仕事はおもしろくないと云つた。僕、僕の信仰を語らざるを得なくなった。15年計画の話もした。調査、調査という声が如何に誘惑的なかを語つた。しかし僕の歩む可き路の只一つなるを説いた。又、Office firstは僕の信仰でない所以を語つた。谷口は驚いて居た。高等学校時代から見て大変異つて来たねと云つた。そういうのは失敬だけれども本当によき見方だねと云つた。

午後4時、十拳君に電話をかける。急に会いたくなつてである。今晚にしようじゃないかとの事で、其のまま東京駅に行き落ち合つて中野へ行く。御飯を頂いて正ちゃんの煙草の事だの何か出て来た。が一番真面目に話したのは嘉代ちゃんの事であった。しかしそれも嘉代ちゃんの事としては極く少しであつて、僕等の結婚問題としてであつた。多くの不真面目な結婚が世に行われて居るのを嘆じた。僕はしかし佐伯さんの事を思わざるを得なかった。名は出す事をさけたが、一人の男が是がために実に苦しんでしかも美事に其の難関を切り抜けた事を語つた。それを見て僕は心安んずると云つた。

彼はそれは誰の事だか聞きたいといった。僕はそれは語るまいと云つた。それから君はフリーかと聞かれたら、どう返事するかと聞いたから、彼自身彼のこの問題に対する態度を明にした。正直に彼はいう。30分程、こんな人を妻君にもraitたいと思う人がある。しかし直にそれは忘れてしまふ。僕には多くの癖がある。その癖をよく知つて、そつちへ僕のエナジーのむき行くを防いで呉れる人がほしいと云つて居た。本当を語つたとは思えなかった。又は若しそれが本当だとすれば未だ未だ十拳君は行く所まで行き切つて居ない事を思わざるを得なかった。僕はどうかというから、僕又真面目にありのままを答えざるを得なかった。

「僕は誰とも約束をした事はないという点より見て自由であるけれども、かくの如き人が欲しいと思う其の人は決して抽象的ではない。現実の人である。この事に

於て自由でない」と語つた。

8時半頃中野を出て東中野まで歩いた。よき星の夜であつた。18世紀に於けるVoltaire[ヴォ



ルテール」とRousseau「ジャン＝ジャック・ルソー」との神に対する地位を聞いた。只帰せんと無理につとめた時に、人の心の自由をとり返せし人それがVoltaireであった。その無神論に深い敬虔の念があった。是を丁度逆に極端に光らせて之の型に於て敬虔たらしめんとしたのがRousseauであった。Historical proportionに注意する人はこの二人の地位の相違と立場とに全然の注意と尊敬とを払わねばならないのである。

○1919年11月4日（火）

馬屋隼氏に電話をかけて一昨日東京を去った事を聞く。麻布の帰りに鷹匠町へ寄って本とサブ・ノートとを受取って帰る。小さな一つの仕事が多忙中の人に役立たんとして嬉しい事である。聖書の事を佐伯さんに頼む。

○1919年11月6日（木）

麻布を出たのが7時半。実によい日である。高島さんがお尋ねしなくなった。行って見るともう□「ベランダ？」はしまつて居る。お月見を予想して来た丈に少々がっかりしたけれども、森を廻つて居る間に元氣快復して其れでもとお玄関に寄つて見る。戸をあけて下さった嘉代ちゃんのびっくりさ加減。驚かれたのは嘉代ちゃん丈ではない。おば様御自身余程驚かれた様である。何となくおかしく又面白く、一時間半程をお話し、よき月を眺めつつ帰る。

『出家と其の弟子』とを読みきつた。又、原稿校正を二、三した。寝たのは3時であつた。『出家と其の弟子』とはよき事二、三を教えて呉れた。一は我を罰し給え、うく可きつみをうけしめ給えとは未だ未だ身の悪業の深さを知らざるを示すという事である。一つは無は他の多くの事同様人間をすがめにするが、ここに特別に注意せねばならない事は、無は時に神様御自身を排斥する事さえある事であるという親鸞の辞であつた。劇そのものは最後が余り感傷的になつて居るせいか、二度読もうとは思わなければ、仲々よく出来ていた。併し未だ未だこの人の信仰は初歩にあるのだと思つた。聖書の辞を唯ひいたというにとどまる如くである。

○1919年11月7日（金）

嘉代ちゃんに手紙を書いて居る。何を書いたか忘れたが、昨夜のお礼であるのであろう。朝、曙町が見える。4日の手紙に対する返事にある。夕方の散歩を約する。夕方、渋谷であつたのは5時少しすぎ。も早く良かった。月は昨日程よくない。白い雲が空一面に広がつて居た。それを透しても来る光も夜明の感を以て四六時中、僕等二人を支配した。渋谷から代々木へ、代々木から堤へ、堤から堀内、中野へ。堤から堀内へ出る路を又間違えた。あそこは余程間違ひ易いと思える。



代々木では二人で一生懸命、正ちゃんの事を心配した。ひよつとしたら、多分明夕、正ちゃんがおば様をお訪ねすると伺った。昨夜特別にお願すればよかったと思う。これからお願に行こうかとも思う。しかしおば様の事だからきつと好くして下さる事と安心して、行くのは見あわせた。煙草を吞む事様々の小事かも知れない。しかし其の根本に於て大事である。十拳君は何となく悪い事が行われ初めたというような気がすると云った。本当にその通りである。佐伯さんは事は人一人一人と思つて居たが慶応は駄目ねと思いきつてしまう。本当にある時には一人が実にも尊く力であるのに、ある時には一人の力は全然無い事もあるが故におそろしい。

堤を歩いて僕等の心は感謝に満ちて居た。たった六月の間に変われば変わるもの。一生懸命に御名をたたえる。

9時の祈をも堤の上であつた。大根の畑が美しくなった。麦がもう穂を出して来た。中野に着いた時にはやや疲れて居た。

○1919年11月8日(土)

仕事は昼に終らなかつた。そのために西大久保についたのは3時を少し廻つていた。お二人ともお留守であつた。明日が母様のお誕生日である。しかし今夜になさつた。皆々様来て下さつた。僕はお祝を頂くとそのまま東中野へ失礼した。

ローマ書8章23節～27節。……〔英語のメモ省略〕……

○1919年11月9日(日)

大手町へ行く電車の中でひよつこり佐伯さん達に会う。ペンを一昨日の散歩の時、落とした相である。お祈にうつむいた時すべつたのを知つて居たけれども、お出とすくつと立つたので拾うのを忘れたのだ相である。昨朝早く行つたが、なかつた。小学校の生徒がたくさん通つていた。小学校の生徒なら誰が使つて呉れてもよろしいという。小学校の生徒なら拾つて届けて呉れるだろうにと思う。

畔上さん「コロサイ書の基督観」

先生「十誠第7条」

母様は初めの先生のお話がよく判るといわれた。判つて頂きたかつたのはこの前のお話であつた。乍併、是日のが判つて下さつて尊く又有難い。是によつて何時かは僕の世の中に対する立場がすっかりお判りになる事もあるかも知れない。

嘉代ちゃんが予告通り、日本髪にゆつて来られた。十五、六のお嬢さんになつてしまわれた。本郷へ歩み、大学の池に出た石の卓子にすわつた。佐伯さんとお美喜さんから聖書を頂く。お祈を以て是をうけた。多くの事が不思議に御恩恵の中に行われます。感謝にたえませぬと同時に一人の友人が僕のために持つて呉れる信頼を有難しと思います。時々はお

祈り下さるのである。どうぞ、彼等の信仰のそむかざらしめ給え。

楓の並木をぬけて椎の木で別れる。急いで家に帰る。例の聖書である。タイトル・ページに、

「政美様

みふみを読みとお祈りになる時には

私共のためにも感謝をささげて下さいませ。

1919秋

誠一、喜美子」

と書いて下さった。すなわち二人の心をそのままに表わしている。

この夕、何とはなしに非常に淋しさが僕の心に來た。何所から來たとも判らない。何の故とも知れない。静かに温めて待つ外無い。特に夕方飯に伺つて、この中に僕の心を知るもの一人も無しと思うた時に淋しさは絶頂に達せんとした。9時を待つて下さる方には申訳無いと思った。乍併7時に心からの祈をして休ませて頂いた。

畔上さん。内村先生。……〔講義要旨の英文メモ省略〕……

○1919年11月10日(月)

起きたのは1時である。朝の祈をしてペンをとる。一つは嘉代ちゃんにあててである。一つは佐伯さんとお美喜さんにあててである。

嘉代ちゃんに書く。

「聖書を頂いた。母もやや判つて呉れた。しかも非常に淋しくなつて來ました。なすべき事をなさず、なすべからざる事をなせりというあの懺悔が非常な暗示を以て來ます」

と書いた。

「訳が判るまで何日かかるか、何月かかるか、何年かかるか知れませんが、判るまでは動きますまい。じっくり待つていますから、其のおりまで安心していらして下さい」

と書いた。

「おば様が桑原さんに手紙を書かせるというお話を伺つて本当に嬉しい。僕がえらかったら、とんで行つてお願する所である。お礼を心から申し上げねばならぬ所である。ずい分雨の降る中を御厄介でしょうが、鎌倉まで行つて頂きなさいまし」と書いた。正ちゃんの事を頼み、

「清き最後の十日を心より願う」

と書いた。

佐伯さん達に書く。又6日の彼の夕を想い出さざるを得ない。どうぞしつかり歩いて行つて下さい。Psalm of Life「人生の歌」アメリカの作家ヘンリー・ワズワース・ロングフェローの詩」の最後の句、



Lives of great men all remind us
We can make our lives sublime,
And, departing, leave behind us
Footprints on the sands of time;—

偉人の生涯を想ひては
われらが生を崇高になし、
離別に臨みて我らも
時の砂漠に足跡を遺めばや。——

Footprints, that perhaps another,
Sailing o'er life's solemn main,
A forlorn and shipwrecked brother,
Seeing, shall take heart again.

足跡、そはおそろく兄弟の、
人の世の厳かなる海原を漕ぎゆきし人の。
これを見て寄るべなき難破の者は
再び勇み振ひ起つらん。

Let us, then, be up and doing,
With a heart for any fate;
Still achieving, still pursuing,
Learn to labour and to wait.

いざ我ら起ちて為さむ、
万難に耐ふる心根をもて
愈々達しては愈々追求め、
働くを学び、待つを学ばん。

〔小池辰雄訳 著作集第八巻『詩歌集』より〕

どうぞ、しっかり歩いて行つて下さいと祈る。

佐伯さんは Life of Thomas Arnold でよろしいとして、お美喜さんに何かあげたい。午後麻布へ行く時に書類会社へ寄つて見る。本の高いのにやや驚かされた。Imitation of Christ(キリストに倣いて)と定めた。

麻布より帰つて川原君に会う。高文のお話をして本とサブとを貸した。若い若い、未だ考えねばならぬ人と思わせられた。

それから急いで西大久保へ行く。町の役所の件。もう僕の範囲とは思われないので、ほつて置いた。殊に

「訴訟の事など夢にも思いも出せません」

と母様に云われた。おじ様のお辞は僕にこの態度をとらせた。所がおば様は正反対なので早くお目にかかりたいと願つたのである。西大久保へ行つて見れば、何でもないうである。おじ様の法律論を通る。

今日、(1)近衛歩兵第三聯隊主計生ときまつた由を中名生さんからお知らせ下さった。本郷の区役所から毎日午後7時から一週間予備教育をするから来いと云つて来た。前の知らせはありがたい。後の知らせはけとばす事にした。理由は曰く、公務多忙。
龍ちゃんと栗屋とに書く。

〔(1)東京・赤坂の近衛歩兵第三聯隊に所属し、部隊の調達・会計・物資管理などの経理業務を専門に担当する候補生〕



○1919年11月11日(火)

朝、嘉代ちゃんに電話をかける。近歩三、主計を知らせるためである。おば様に何日鎌倉へいらつしやいますかと伺う。来週の日曜との事である。祈つて居りますという。それから散歩はいつと伺う。其の後との事であつた。

お美喜さんに Imitation of Christ にそつて Daily Strength がさし上げたくなった。4時用事をすませて丸善に行く。ひょつこり高島さんのおば様がペンをとつていらつしやるのに出くわした。嬉しい事は嬉しかったが本当に面喰らつてしまった。丸善に無く教文館へ行く。御挨拶をして出ようとすると、おば様にあなたにお祝にとペンをとりに来たのです。どうぞおとりになるのはひかえて下さいとの事であつた。

帰りに西片町へお知らせに伺う。おじ様は金の事に就いて色々とお心配下さつた。有難い御親切である。十拳君、佐伯さん、栗屋に徴兵の事を知らせる。

○1919年11月12日(水)

夜帰ると高島さんのおば様と嘉代ちゃんからお手紙が来て居る。散歩は明日にしようじゃないかとの事である。場所はやはり僕に定めよと仰しやる。発意はおば様はこの間の電話で知つた。おば様に発意せしめしもの嘉代ちゃんなる事うたがいなし。

おば様のお手紙にはもう一つあつた。

「過去に於て様子を知らせる事を僕が余りひかえたのを口惜しいと思う。これから

は時々書くように」

といわれる。それでペンを与えて下さつたのである。胸が痛む。

30日の心より僕の心は遙かに強くなつた。踏む可き道を確認する事が出来るようになった。すぐ電話をかけた。明日12時半頃、代々木でお目にかかりますとお約束をする。

○1919年11月13日(木)

曇つて居る。9時半に電話をかけて嘉代ちゃんと出掛ける事を相談する。残れる一週間の一日たりも美しくする事を得しめ給わば、其のために僕を使い給わば、是に越したる悦はない。

お昼、愈々出掛けようすると、霧が降つて居るに気がつく。おやと思わぬではなかつたが、ままよと行く。幕惣で葡萄のおいしい所をえらんで貰い代々木へ行くと、嘉代ちゃんに来て居られた。おば様も橋の彼方に居られたが、変な事には河波さんの奥さんが居られる。嘉代ちゃんに丈行つて貰つて僕はプラット・フォームを出る。暫く待つとおば様方もいらした。新宿まで歩いて井ノ頭に向かう。

井ノ頭までの道は例によつて実に美しくあつた。井ノ頭も秋の色々がやや下に見えたが梢はみんな青かつた。不思議に春を思わざるを得なかつた。森の奥の奥、水の畔に座しつ

つ葡萄を食べながらお話をする。

「誰か(僕は)連れがある様に思えたので折角のお弁当を持って来ず惜しい事をした」と仰しやる。大笑である。何時とはなしに話は真面目になる。

「何時から(僕が)聖書を読むようになったか、どうしてか」と仰しやる。

「二昨年の暮どうにもこうにも動きがとれなくなりました」

としか申上げられなかった。

「何とも判らず非常に淋しくあります」

と申し上げたのに対しては、

「強くなつて頂戴」

と励まして下さった。

「そうそう、(僕が)聖書を読むようになろうとは夢にも思わなかった」

といわれた。正ちゃんに對し所々にくぎを打って下さった事をお話し下さった。

おば様をおいてきぼりにして——標示を読んでいらした——ピンをおとしたと仰しやつて捜しました——僕と嘉代ちゃんと二人きりで歩いた。

「どうも悪いことをしました。なす可き事なす可からざる事を取り違えて参りました。どうぞゆるして下さい」

と申上げる。

「おば様も強くなれと仰しやいます。神様がいらなければトラピストは非常な誘惑です。しかし神様がいらつしやる以上、おそらく強くなれるであろうと思います。強くして下さいと思いますから僕には心配なくあなたの道をしっかりと歩いて下さい。あなたの前途決して世の中が無責任に云う程簡単とは思いませんが、しかし常に神があなたのためにあの時のままの心で祈って居られるのを忘れにならないで下さい」

と願う。二人でひざまづいてお祈をする。

「おば様はよき友たる事を誓えとおすめになつて下さいます。誓いの弱きを知ります。お祈を致します。よし不信仰時代の僕に對して、この友情が許されたと致しまして、今は共に信仰の生活に入りました。どうぞ何時までもこの友情をはぐくみ給え。どうぞ御心ならば何時までも何時までも聖ならしめ給え。只御名によつてのみと願ひまつる」

と。祈り終つて心は清らかである。嘉代ちゃんの優しいおとなしい乙女らしい聖なる祈を聞く事が出来て本当に力であつた。有難かつた。

お美喜さん方の話が出た。

明日聖書に書く可き辞について相談した。今の所は、

「悦^{よろこび}につけ愁^{うれい}につけ御名を讃^{たた}うる時
彼も彼所^{かしこ}に御心を痛めて祈りつつ
彼の日^かを待ち給えるを感謝致しましょう。」
ときめた。

「若し桑原さんの感情を少しでも害するならば、僕はお名を書きません」
といった。しかしそれは嘉代ちゃんの望みで「嘉代子様」と書く事とした。

名といえば手紙の宛名は僕が勝ったようで実は負けたるを白状した。それから、正ちゃんの云った事、即ち

「何か一つ嘉代ちゃんの胸にわだかまってるもののある事を今日は伺いたい」

と思った。乍併、一言も嘉代ちゃんは云いたくない様であるから僕はすぐ辞を継いで、

「人には一人の胸に秘めておくが故にこの上もなく尊いあるものがある。それならそれも其の中に秘めて置いて下さい」
とお願ひする。

二人で紅葉の葉をつんだ。僕のつんだのは二枚、同じ小枝から出て居たのであった。それをわけた。嘉代ちゃんは小さい紅葉を二枚つんだ。それを二人でわけた。何となく片瀬の昔に帰った様な気がする。

夕方も近づいたので、お婆様のお誘い下さるままに神田川へ行く。一寸嘉代ちゃんの立つた後にお婆様が、

「嘉代はトラピストにして下さいと申しました事がございます。それはいけません
と申しましたら、其の後は何事ももう神様にお願致しましたから御安心下さいましと申して何にも話しません」
と仰しやる。

「若し神様がいらつしやらなかったらトラピストは僕には強い誘惑です」

と云った昼間の辞が非常な勢いでおしよせて来る。明日30分程お話を一人でさせて下さいましとお願ひする。

クロスを仰ぎつつ万世橋でおわかれし、本郷で髪を刈って帰る。9時のお祈は頭を刈っている最中。お祈をして居る中にねむくなった。

○1919年11月14日(金)

3時半頃、大手町を出て中渋谷に行く。おひるに際してもらった昨日お婆様から頂いたペンと「研究十年」「所感十年」「宗教と現世」とを持ってである。

手と顔を洗わせて頂いて、お祈をして相談をして、聖書の白紙に例のペンに第一の役をつとめて貰った。

「嘉代子様



悦につけ愁につけ神に御前にひれ伏す時
彼も彼所に御恩恵深く祈りつつ

大いなる日を待ち給えるを讃めしめ給え。

1919年秋

政美

「ベランダ？」に出て大空を仰いで多くの心におこれる思をこめて嘉代ちゃんに、
「どうぞ長い間おつかい下さいまし」

とお渡する。それから、

「今日は一つ伺いたい事があります」

と申すと、嘉代ちゃんも

「昨日はどうしても云えなかったが今日は僕に伺いたい事がある」

といわれた。

静枝さんがお浚とかで勇さんが御飯を待ったためおば様とお待ちになる。敦さんは敦さんで高商の英語会へ行かれたので結局、嘉代ちゃんと磯雄さんと三人で頂く。トルストイの事など話しながら御飯もおいしく頂いた。

嘉代ちゃんと二人になった時、祈の後で伺ったのはこんな事であった。

「静かに生を楽しんで居る僕を嘉代ちゃんの事のために乱して誠に申し訳無い」

というのであった。僕いう、

「決してそうではありません。高等学校の時代から聖書にとらわれるまで3、4年の間に僕の多くの友人は荒んで行った時に僕をひきとめて下さったのはあなた御自身御存知かどうか知らないけれども其れはあなただったのです。それから昨日おば様が、僕がどうして祈るようになったかとお聞きになった時に、ヘルプレスになりましたと申しました。一方本当に祈って下さる方のあったのを信じない訳には参りません。其の一人は唯にあなたであったのを信じます。有難うございましたとは僕の申し上ぐ可き事で、あなたの申す可き事ではありません」

と。それから伺う。

「あなたはトラピストに行きたいといわれた事がある相ですが、僕は昨日うつかり神様が居られなければトラピストも僕には強い誘惑ですと申しましたのを忘れる事は出来ません。今でも併しあなたはそうですか」

という、

「そうだ」

といわれる。僕はトラピストにどうしても無理のある所を説いた。

「僕自身のトラピストへ行きたいという気持には神様にすねて居る所がどう考えてもある事を見逃す事は出来ません」

と申した。セント・ポウロをひく。……〔英文省略〕……。

「僕の信仰があなたの信仰と今直ぐなるかならぬかは問題にしますまい。唯よく申上げた事文は覚えて下さい。そして若し尚最後にまでトラピストを正当とし是を人の行く可き唯一の道とせられて引かれんとする時には、どうぞ一言僕に相談して下さい。下さる事をお約束ください」

と願う。尊いお約束は出来た。

あとはお祈りである。お祈りがすむと嘉代ちゃんは、

「小さい銀のクロスを長く胸につけて居りました。少し汚れましたがどうぞ長く」といつて下さった。有難く頂く。

おば様と三人で色々お話をした。どんなに嘉代ちゃんの周囲に愚な人間が多いかを伺った。段々のお手紙の内容が判つて来た。

「それから、若し信仰に関するお返事が来なかったら、どう致しましょう」

という大切な問をかけられた。僕はいう、

「あなたは桑原さんを信じられましょう。そうすればお返事は来ます」

「誤魔化すつもりではないのでしょうか」

との第二の問に答えては、

「是非お母様に行つて頂きなさいまし」

と申す外なかった。

9時半、車で送られ肩掛けにつつまれてあたたかくお辞をする。

歩む可き覚悟を母様にお話した。

○1919年11月15日(土)

役所から原宿に。おば様にお礼を。原宿から家に。夜、東中野に、東中野から西大久保に。藤井先生、ローマ書8章28節～30節。……「英文の講義要旨メモ省略」……。

佐伯さんと新大久保で別れる。祈つて呉れる事をくれぐれも頼んだ。

武田のおば様は僕を待つて下さった。9時半から12時まで諄々と語るを熱心に聞いて下さった。聞き終つて仰しやつた事は

「おばさんが悪かった。政さん、御免なさいね」

であった。初めて嘉代ちゃんに会われた時、僕のために嘉代ちゃんがほしく思われた相である。

「二度お話をしたが修行中の事ではあり、其の機会の与えられざりしを申訳なく思う」

と仰しやる。僕申上げる。

「神様がお与え下さるものならば下さるはずです。僕今の所何の予期をもたずに二、三日を暮らします。若し下さらなくば、僕は一生家を持つ事は許されますまい。」



愛の罪惡になり易きは其の神をもう□ら□事のあり得ぬかによると申します。トラピストも誘惑します。しかし僕の一生は外面的には極めて平凡でありましょう。内面的には偉大なものであつてほしいのです。心のかわききる事なく強くなれよと云つてくださったおば様と、嘉代ちゃんの贈つてくださったものにとに慰められて雄々しくも温かくも暮らして行きたくあります」

と申上げる。おば様は涙を流して聞いていらつしやつた。祈つて休んだ。

○1919年11月16日(日)

おば様から10円拝借した。大久保の座敷に頑張つて嘉代ちゃんに書く。

5月25日のトラピスト観をひいた。

“Life is real, life is earnest!” 「人生は真実なり、人生は厳粛なり!’」

「神を愛する者、すなはち御旨によりて召されたる者の爲には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。」(ロマ8・28)

高島さんからお手紙がとの事に帰つて見た。桑原さんからのお手紙が入つて居る。

「仰しやる事はよく判る。母の嘉代子さんを待つことは公知の事実である。私にもまさかの時の覚悟がある。遺言にも書いておく。兄弟の了解も得てある。只今それを書くのはお互の感情のためにまずい。書かぬが信じて呉れ」

とある。こんなに一生懸命になつて居る事をかくも簡単にとりあつかつてしまう人の心を浅しと見る。

大手町の帰りに大学をぬけて大きい石の上に立つて、Life of Amoll(「御恩恵と御心が深くも顕われし夏は秋なりし我」と書いた)を佐伯さんにImitation of Christ(「御心のままに優しくも雄々しく歩ましめ給え」と書いた)とDaily Strengthとお美喜さんに贈る。

佐伯さんの祈につれて祈る。

「お父様、若しあなたのお導きと彼のお祈となくば、私には歩き得ぬ大きい荷が今双肩にかかるを覚えます。どうぞ雄々しくも歩ましめ給え。私一人の悲と苦しみとはきつとあなたが堪えさせて下さる事を信じます。乍併、幼き者が迫害さるるのを見ては苦しくてたまりません。どうぞ是を助くるに大胆ならしめ給え。この誤解と悪評とおそろる事無く歩ましめ給え。と同時にその大胆に名を借りて私心を遂ぐる事勿らしめ給え。不名誉が私一人のものならば堪えます。只あなたの御名にかからぬようになさせ給え。多くの祈口をつきますが、今は心そのままを御前にささげ奉ります。クライスト御自分おとりなしの上おきき下さらん事を。アーメン。」

西片町でお夕飯。夜おそくまで静かに歩いた。踏む可き道が明日になつて来た。僕のためならず、彼女のため、神様のため、苦き盃を吞まねばならない。



帰るとおば様と嘉代ちゃんからお手紙が来て居た。何が何やら判らなくなった。火曜日を待ちますというお返事を出した。……〔講義要旨の英文省略〕……

○1919年11月17日(月)

大変たまった日記を朝4時におきて書き出す。6時頃母様もおおきになり、僕の側におすわりになってお話が始まる。僕に

「家に不満があるのか」

と仰しやるのである。順々にお話が進んで行く。いつもの通り母様は河の彼岸を歩いていらつしやる。僕はあちら側にいる。一度この川を渡ったものは又これをもとの岸に渡り戻る事は出来ない。出来ることは

「お渡りなさい」

と手を出すばかりである。二年間手を出してお待ちした。空しい手を出す苦しさは出した人でなくては判らぬ。外の彼岸の人はそれには目もくれず、只彼方へ帰らぬを不満とせらる。くりかえし言う僕が戻るは是絶対的不能である。一緒になりたいのです。どうぞ来て下さい。僕は手を出します。川を渡るのは母様御自身です。渡るには川の水量がましはせぬかと思われる程の罪に泣く涙がいます。苦が必要です。僕はそれを払って来しました。母様も即ちにお渡り下さい。見る目もつらくありますが、僕はつらさをこらえます。それが本当によろしいのです。何時かはそれのよろしいのがお解りでありましょう。

母様は、

「嘉代ちゃんに帯どめをお祝にあげたい」

と仰しやる。ご相談の上、おば様と僕とでえらぶ事にする。7時西大久保へ行き、お昼三越でお目にかかる。あれを悉くお目につけた。

「是から母様が心配多くなれます。どうぞ慰めてあげて下さいまし」

とお願したが、訳は通らなかつたようである。おびどめより羽織の紐の美しきがあつた。それに定める。

実さんを団さんに紹介。浅嘉町へフルンケル切りとお辞乞^{いとま}。項をたれて歩む毎にあるものが僕の胸をうつて

「強くなれよ」

といわれたおば様のお辞^{ことば}を繰り返して下さる。又一步一步を歩く毎にあるものが胸をうつて、

「彼の如く人を愛せよ」

と教えて下さる。有難き限りである。強くなさしめ給え。愛せしめ給え。安らかなる心を持って大きい仕事——人の目からは小さくも神様の目からは大きい御仕事をなさしめ給うを有難しと思う。



曙町をお別れに訪れて二人で心から祈る。
お美喜さんの優しいお祈を見た。彼はききあげ給うであろう。
母様は高島さんへ行つて下さった。
「もっと早くお目にかかりたかった」
といわれる。何事も御心なる哉。

Resignation

—Longfellow

「あきらめ」

—ロングフェローウ

1

There is no flock, however watched and tended,
But one dead lamb is there!

There is no fireside, howsoever defended,
But has one vacant chair!

2

The air is full of farewells to the dying,

And mournings for the dead;

The heart of Rachel, for her children crying,

Will not be comforted!

3

Let us be patient! These severe afflictions

Not from the ground arise,

But oftentimes celestial benedictions

Assume this dark disguise.

4

We see but dimly through the mists and vapors;

私たちは霧や立ち込めるもやを通して、
かすかに見るだけだ。

Amid these earthly damps

What seem to us but sad, funereal tapers

May be heaven's distant lamps.

5

There is no Death! What seems so is transition;

「死」など存在しない。そう見えるものは
「移り変わり」にすぎない。

This life of mortal breath

Is but a suburb of the life elysian,

息を吸って生きるこの人間の命は、
至福の地(エリシオン)の生活の郊外にすぎず、



Whose portal we call Death.

6

She is not dead,—the child of our affection,—

But gone unto that school

Where she no longer needs our poor protection,

And Christ himself doth rule.

7

In that great cloister's stillness and seclusion,

By guardian angels led,

Safe from temptation, safe from sin's pollution,

She lives, whom we call dead.

8

Day after day we think what she is doing

In those bright realms of air;

Year after year, her tender steps pursuing,

Behold her grown more fair.

9

Thus do we walk with her, and keep unbroken

The bond which nature gives,

Thinking that our remembrance, though unspoken, 私たちがこころで苦しんでいるあいだにも、

May reach her where she lives.

彼女は慈愛によって、その輝かしい
気品をいつそう磨いていく。

10

Not as a child shall we again behold her;

私たちは、もう彼女を「子供」として
再び見ることはないだろう。

For when with raptures wild

In our embraces we again enfold her,

私たちが再び彼女をこの胸に抱きしめるとき、

She will not be a child;

彼女はもう、子供ではないのだから。

11

But a fair maiden, in her Father's mansion,

そうではなく、天なる父の館にいる
美しい乙女として、

その門を、私たちは「死」と呼んでいるのだ。

私たちが愛したその子は、死んだのではない。 —

ただ、あの学校へと旅立ったのだ。

そこではもはや私たちの不完全な保護は必要なく、
キリストご自身が治められている。

あの偉大なる回廊の静けさと孤高のなかで、

守護天使たちに導かれ、

誘惑からも、罪の汚れからも守られて、

私たちが死んだと呼ぶその子は、生きている。

明くる日も明くる日も、

私たちは彼女が何をしているかを想う、

あの輝かしい天空の領域のなかで。

年を重ねるごとに、彼女の優しい足取りを

追いかけているが、

いつそう美しく成長していく彼女の姿を見るのだ。

このようにして、私たちは天上の世界の
交わりのなかに

彼女の姿を見るだろう。

私たちがこころで苦しんでいるあいだにも、

彼女は慈愛によって、その輝かしい

気品をいつそう磨いていく。

私たちは、もう彼女を「子供」として

再び見ることはないだろう。

なぜなら、激しい歓喜とともに

私たちが再び彼女をこの胸に抱きしめるとき、

彼女はもう、子供ではないのだから。

そうではなく、天なる父の館にいる

美しい乙女として、



Clothed with celestial grace;

天上の気品を身にまとい、

And beautiful with all the soul's expansion

魂のあらゆる広がりによって美しく輝く

Shall we behold her face.

彼女の顔を、私たちは目にするのだ。

12

And though at times impetuous with emotion

時には、激しいささやきが

And anguish long suppressed,

彼女を連れ戻そうと、虚しく連呼し、

The swelling heart heaves moaning like the ocean, 砕かれた心は、途切れ途切れのささやきのなかで、

That cannot be at rest,-- 彼女の足跡を追うことができなくなるとしても。

13

We will be patient, and assuage the feeling

私たちは耐え忍び、その感情を和らげよう、

We may not wholly stay;

完全に抑えることはできないとしても。

By silence sanctifying, not concealing,

解き放たなければならないその深い悲しみを、

The grief that must have way.

隠すのではなく、沈黙によって

神聖なものとしながら。

佐伯さんの所にこの詩をおいて来た時に母様を訪問して下さいとも頼んだ。

○1919年11月18日(火)

愈々渋谷へ最後に伺う可き——嘉代ちゃんの高島嘉代子さんとして僕に会える最後の日が来た。朝、日記を書いている。今日とる可き僕の態度について母様と御相談をした。御名を借りて悪事をする事なく、彼女のためといって僕のためにする事無く、最大胆に最細心に——しかも凡て僕の安心のために、母様に依って昨日の中渋谷の御様子を知りえたが故に、

「只彼女は心から御心となしつつありや否やを僕の安心のためにききたい。若し万々一それが願いでなかったのなら、其の時にはもう今日と雖お考え尚ほしと願う」

と思う。但し事はおそらくは御意のままに円満に行く事と思う所以を申しあげる。鎌倉訪問については母様の深い深い御注意を伺った。尚西大久保に伺うようにとの事であった。咽が痛む。昨夜やいて下さった時、硝酸銀が流れこんだ様に思えたが其の故かも知れない。痛む所は昨夜より奥の部位である。それに雨も非常に強い。尚更日記も貯って居る。という色々の訳で母様のお許を受けて休む事とする。

お昼少しすぎたら日記もすんだ。西大久保へ伺う。昨日のお礼を申上げる。羽織の紐が大変母様のお気に入ってよろしかったとお悦び下さった。おば様も僕の鎌倉行きについては反対であった。

「それは桑原さんの堪え得ない所であろう」

と言つて下さる。おば様御自身、宣ちゃんとの事をお話し下さった。鎌倉行きは昨日までの僕の願であつたけれども、母様おば様の御意見に僕は決心が出来た。母様と僕との事に就いて色々お話をする。

「僕自身二年間一生懸命苦しんで来たのですから、今に至つて母様が一足飛びに僕と一緒になさろうとお思いになつても、夫れは無理です。どうぞ苦しむ丈苦しんで下さる事をお願いする外ありません。果で見える目もつらくありますが、止むを得ません」

と申し上げる。3時お辞をして中渋谷へ伺う。おば様は鎌倉行き丈は是非会つて僕にとめたいと思つていらした事で本当によかった。全くうれしいと仰しゃつて下さった。

中渋谷へ伺う。嘉代ちゃんお暇乞に歩かれて未だ帰らず。僕の順序は「おば様から嘉代ちゃんの心を伺う」と思うのであつたので、順序通りに行く事を願つて居る中に、お客様が見えてしまう。四畳半に逃げ込んで、敦さん磯雄さん等とお話をして居る中に嘉代ちゃんが帰つて来る。僕と二人きりになった。

順序の変更も何かの意味と思つて、

「僕この間から伺いたくて伺い得ぬ事が一つあります。あなたの心の一番奥底にあるものでありますがどうぞお話しになつて頂戴」

とお願をして、

「こんどのお話はあなたのお願でしたか」

と伺う。嘉代ちゃんが涙ながらに伝えて呉れた辞そのままを今ここに移し書く事はそれは出来ないけれども、

「罪の観念に強くせめられてどうしても云う事が出来なかった。是で戦つて参ります。是が御心と思います。お免し遊ばして」

と云われる。

「おば様のお心も同一ですか」

と伺う。

「そうだ」

と伺つて、僕にはさっぱり判らなくなる。果してそれが御心なのであろうか。僕から見ると不合理のしか見えぬこの行きさつが果して合理的なのであろうか。僕の観方の何所に欠け目があるのであろうか。早くそれが知りたい。

乍併、嘉代ちゃんの信仰は僕の信仰の親であらねばならない。僕も嘉代ちゃんと同じ運命を甘受し感謝せねばならない。

「それでは嘉代ちゃん、しっかりいらつしやいましたね。僕もしっかり参りましょう。

おそらく僕は家を作る事なしに一生戦つて参りましょう」

僕等のお互いの信頼と愛情と友情とは茲まで行かねばならないものであった。お祈を初めようとするとお客様がおかえりである。

お膳が来た。おば様と三人で各々よき夕の御食事である事を特別に祈ってお箸をとる。ニコニコしながら頂いた。何も思わずに頂いたが、少ししか食べられなかったのが事変であった。お食事がすんで果物がすんでから僕から申上げる。

「桑原から返事が参りましたし、もうそれで満足致す外ありませんから、荷物も鎌倉へ贈りました」

と仰しやうたからであつたかも知れない。

「僕の申上げる所誤つて居りますかも知れませんが、どうぞお聞き下さいまし。僕には桑原さんのお返事は判りませんでした。こんなにこちらで心配していらつしやる事をそれをおば様のお筆でお書きになったのに対してあれ丈のお返事しかお書きにならぬ方は——おば様は御本人を御承知ですし、僕はあれを通して推測するばかりですから判断の相異なるは寧ろ当然です——どうしても僕を御了解になる事は出来ません。万々一桑原さんが僕を御了解下さつても桑原さんのお母様が僕を御了解下さるという事は夢にも思えない事です。其のために嘉代ちゃんの苦をよし第一信仰の事について桑原さんと嘉代ちゃんとの間に相異の点が顕われた時はそれは常に小池が嘉代ちゃんの後にいるからだという事になつては大変な重荷を加うる事になりますから、僕はお目にかからない方がよろしいと思います。お手紙も悉くおば様を通して致しましょう」

と申し上げる。おば様も

「夫れがよろしかろう」

と御同意下さった。そして早く僕自身が家を持つて、桑原さんと直接のお友達になり、間接に嘉代ちゃんのお重荷を助けるという人間らしい武田のおば様の方針を是となさった。僕は祈が更に力強きを知つて居る。おば様も強くは仰しやらなかった。

それから、

「僕おば様に先に伺おうと思つて居りましたが順序が變つて先に嘉代ちゃんに伺うようになつてしまいました。どうぞおば様のお考をお聞かせになつて下さいまし」とお願をする。

「もう何にも申し上げる所はございません」

おば様は涙ながらに仰しやる。

「結納をすましますと急に嘉代の様子が變つて参りました。若し不服なら、ままは何時でもやめて二、三年はゆつくりおうちに置きますから、心を開かしておくれと何度申したか判りませんが、何も彼もお祈り致して参りましたから、どうぞというこたえばかりでありました。先日あなたのお手紙を読みましてから、よく寝た

夜とては一度もございませんでした。金曜の夜、あなたのお帰りになってから初めて心の中をすっかり話して呉れました。そうであつたかと思いましたが、私は何も申さずに休みました。土曜の朝、又こんどは覚悟を申して呉れました。若し万々一不縁になつても二、三年は小池さんの所には参りませんと申しました。私は激くほめてやりました。もうもう何とも申上げる所はございせん。」

僕の口に辞はないかと云われた。頭を下げて申し上げる。

「僕も何にも申上げる事が出来ません。御辞有難く承りました。おば様をかくまでお苦しませ母とおばとを苦しめました事、是は僕が終生負うて参らねばならぬ罪であります。この一番僕にとつてつらい五十日をかくまでも美しく暮らすを得させて下さいました事に対しましてはお礼の申上げようもございせん。どうぞ、おば様、おば様が最後の息をおつきになります時に、僕が何所に居りますか存じませんが本当におば様のためにお礼の感謝を捧げて居りますのをお覚え下さいまし。少くとも一つのよき事本当によき事を地の上にてなしたという御確信をお持ちの事をお願いします。嘉代ちゃんにも心からお詫びをする。」

僕から何にもいう事が出来なくなつた。帰ろうかと思つたけれども、あとで少し休んでお祈をしておば様とお約束をする。おば様は子供さん方の方へ行かれた。僕クロスを12月のはじめは少し外さねばならぬ事など話しながら嘉代ちゃんとお別れに讃美歌を歌う。125、241、309番〔註：旧241番(現319)「わづらわしき世をしばしのがれ」、旧309番(現359)「夕日はかくれて道なお遠し」

おば様の御安心を願うお祈は後の事として、丁度9時になつたので佐伯さんの病氣おみきさん達のために祈る。

嘉代ちゃんが祈り終るか終わぬにお客が見える。曰く、桑原さん。

大変な所に来合わせたと思う。暫くして僕一人の所におば様が入っていらして

「お会い下さるか」

と仰しやる。

「どちらでも」

と申上げた。桑原さんに、

「お会いになりますか」

と聞いていらつしやる。

「お目にかかりましょう」

と仰しやる。お座敷へ出て行く。33と伺つていた。その割には若く見える方である。しかし何故か澁刺たる所が無い様な方である。子供らしい方である。僕程深い苦と悩とに会つた事のない方の方である。深い所□まれた所のない単純な方である。是は僕の相手ではない。この人に対して戦を宣するのは惨刻すぎるという気が直覺的に起て来た。

20分程お話をしてお祈の機会を失ったのを残念に思いつつお辞をする。

「どうぞよろしく」

という桑原さんの御挨拶があった。僕はもうお目にかからないつもりなので、是は全く思いがけない御挨拶であった。何とも申さず只頭をさげた。

「兵隊へ行きますまでにはもう一度伺います」

と申上げる。

「どうぞ」

とおば様もお待ち下さる由仰しゃつて下さる。嘉代ちゃんには

「御機嫌よう」

と申して荷物を手から渡されて式台を下りる。もうあわれないかと思うとやや悲しい。そんな事をいう可き機会ではと強く思いかえし車に乗る。

「政美さんお静かにお暮らしなさいまし」

と仰しゃる。おば様のお辞に心からお礼を申上げて、今夜からはよくお休みになる事を願して、中渋谷を出る。

床についたのは11時であった。

○1919年11月19日(水)

4時少しすぎ起きて、昨晚三人で捧げ可かりしお祈を書き出す。

僕のためにという心少しも動かず、只嘉代ちゃんのためにと考えて祈つてここまで来り、何も彼にも殆ど不可動ときまつて見ると今度は急に僕自身の事が回顧られた。9月以前に僕がなさねばならぬ事を僕はしなかった。9月21日以前に僕がせねばならぬ事をなさなかった。9月28日以前に僕がせねばならぬ事をなさなかった。昨日以前に僕がせねばならぬ事をなさなかった。凡て凡て動かぬ今となつて尚漸く自分に帰つて我の罪の重きをおそると同時に我が悲の大なるに驚いた。現在が悲の絶頂ならば段々つきには細くなつて行く事を想像し得るけれども、悲は他人には知られぬ悲は自ら自分にも判らなく刻一刻其の度を増して際限無からんとするを見て涙出でざるを得ないのである。

明日よりは未だ今日の方がという気が動く。母様に起きて頂く。

「どうしても僕と嘉代ちゃんとのこのなり行きに理解が付き兼ねる」

由を申上げる。母様は

「御本人の意思がきまつた以上、如何とも致方がない」

と仰しゃる。

「しかし若しそれが見す見す死に行くものであつたら、僕がとるとらぬと全然数年後の問題としておいた。もう一度おば様に考えて頂く可きではありませんまいか」

と伺う。内村先生、藤井先生にという気が出ないのでもなかった。



どういう順序であつたか判らなかつたが、其の時僕等二人が生きようとすれば多くの人が死なねばならぬという声が聞こえて来た。独身主義を抛棄した桑原さんも死ぬのである。不信者にして信者に申込みし罪であるかも知れないが、高島さんのおば様を殺す事は僕のなし得る所ではなかつた。桑原さんのお母様も死なれるであろう。死に行く僕等は召されるままに死なねばならない。もう黙せん黙せん。

「嘉代ちゃんと僕と死にましよう」

と祈る。只もう二人を殺した以上、第三人目を殺す事丈は母様お許し下さいまし、とお願いする外なかつた。

祈のこの部を書いて、静かに中渋谷へ行く。おば様にお手渡をする丈で、もう嘉代ちゃんにはお目にかからずに帰るつもりであつたが、是非にといわるるままに上つてお茶を頂き、一寸御□代りをとらせて頂く。

「何か僕にお会いになつて桑原さんは不愉快な御様子ではいらつしやいませんでしたか」

と伺うと、嘉代ちゃんに政美さんというのは御名か御恬かと聞かれた由をお話し下さつた。よい天気である。うがいを見せて頂いた後、三人例のお座敷にひれ伏して祈る。おば様は例の聖書、僕等の祈の書いてある聖書をお持ちになった。——お別れの聖書とお祈とを捧げる。

「お父様、お父様、お父様とのみ御名をたたえて参りました。今日も亦お父様をあがめしめ給え。お父様に召されました事最私が致します故に私に第一のお祈をささげしめ給え。おそらく誤多き事でございましょう。どうぞあとより祈らるる嘉代ちゃんとおば様とのお祈りに正され、彼のお祈と合わせて御前に至らん事を願上奉ります。

二年前ふと一冊の本によりヘルプレスになり、多のよきお友達の知らぬ中のお祈に助けられ、若しそういう事を許されますならば、彼の御恩恵に依り天地が変りましてから今日まで一日として御いつくしみの深きに泣かざる日とは御座いませんでしたけれども、この五十日程御胸のまざまざと顛われし日はございませんでした。一步を歩く毎にあるものが胸をうつて、「政美強くなれ」と仰しやつて下さつたおば様のお辞を繰り返して下さいます。一步を歩まん毎にあるものが胸をうつて「人を愛せよ」と教えて下さいます。一步を歩む毎にあるものが胸をうつて「神をおそれよ」と教えて下さいます。いつでも道は二つに別れます。その時常に僕はつらい道を歩かねばならぬをおぼえます。歩かねばならぬは「御許へ来るにはここを歩け」とさきに行きし多くの人がおしうるが故であります。あなたは尊き一人の先輩をつかい給うて、あなたを愛しあなたに召されしものには悉くの人に別なくも、病も悲も時には自己自らの罪と涙も悉くあなたへ一步、僕等



をひきよせ給う事を教え給いました。どうぞその御心のままに一步近よせ給え。彼の歩まれしその時のつらき心と、人類を愛する深き心と、あなたを尊ぶ深き心とを持って、□いて彼の歩み給いしこの土地の上を御愛によりて召さるるまで歩み行かしめ給え。是僕に関する凡ての感謝と祈とであります。

昨日、桑原さんに初めてお目にかかりました。お年は僕よりめしていらつしやいます。僕程の御苦労も無く今までいらした方のようにお見受致しました。乍併、お父様、若し御心ならば大いなる悲を歩んで彼を召し給え。本当に御心になんか一人の日本人あらしめ給え。彼に本当の信仰を与え給い、彼に本当のホームを与え給え。そのために若し僕の存在が邪魔になりますならば、どうぞ僕に特別な御用を早くなさしめ給いて召し上げ給え。其のために嘉代ちゃんを遺憾なく使い給え。どうぞ犯せる大いなる罪にもまげて大いなる御仕事をなすを得しめ給え。何事も御心ままにまかせ奉ります。

乍併、^{しかしながら}何事も桑原さんに授けつつも若し世間にあるある如く「お嫁に貰つてしまえば信仰などはどうでもなる」という様な者が少しでも嘉代ちゃんの周囲におこり、之を無視し是をしいたげんとする事がありましたならば、どうぞ其の時には猛然と世の中に反抗し大いなる力を以て是にうち克つを得しめ給え。何時までも何時までも、今日の清き心と強き信仰とを以て暮らし行くを得しめ給え。

おば様、かくも美わしくこの五十日を暮らさしめ給いしを感謝し奉ります。ありのままを申上ぐれば僕の生まれましてより25年の間に最も美しい時でありました。夫^{それ}をかくも美しく暮らさしめ給いし事に対しては何にもお礼の申上げようもございません。大きい苦しみでございましたが、御覧の通り強くなろう、しかし同時に人を愛しよう、彼をおそれざる切に彼のなし給えるあとを追わんと願つて居ります。只今すっかり御安心下さいます事が出来ませずとも、少なくともいつかはすっかり御安心下さる緒となすとも只今のお祈の中にお求め下さればと祈ります。この事その失敗に帰せし時、彼をもうらむが故に罪になり易しとある人が教えました。其の意味に於て罪を犯さざりしを本当に幸に存じます。乍併、そのおば様をお苦しませまし、母とおばとを苦しませました点に於てのみは計らずして大きい大きい罪を犯してしまつた事に気がつきます。是は一生負つて行つて、クライスト御自身にゆるして頂きます。悪い事を致しました。どうぞ正当の罰をお下し下さいましと願うは罪の罪たるを知らぬ人の言う事であると聞きました。今すっかりそれを思いがいたします。他の凡ての罪が許されるにしても、是にして許されなければ、僕彼に彼の前に立つ事は出来ません。どうぞお許し下さいまし。もう一つお願いしたき事がございます。それとお父様あなた御自身御存知でいらつしやいますからやめます。感謝とお祈りと胸に満ちて居ります。口に上る事



は是を以てやめと致しますとも悉くあなたは御存知でいらつしやいますから是でもうやめます。

どうぞ嘉代ちゃんとおば様とのお祈で僕の誤りの正されん事、やがて彼のおとりなしに依り自分にあらん事を許さしめ給え。涙は皆感謝の涙でございます。」

祈り終つてホツとした。どうぞ神さまお父様、何時までもこの祈を心より絶えしめ給わされ。

「嘉代子さんお入り下さい」

とおば様が仰しやる。嘉代ちゃん一生懸命祈つて呉れる。

「どうぞ、罪深き者をめぐみ給え。どうぞ、強からしめ給え。どうぞ、人を愛せしめ給え。御心のままに御あとを追わせ給え。考えの足らざりしを許し給え。心の平和を与え給え。雄々しくも最後まで戦い行くを得しめ給え。」

僕のためにも「雄々しかれ」と祈つて下さった。胸のクロスが相応する如くであった。切なる祈りと、すくい主のめぐみ給わん事を声を合わせて願ひまつる。

最後におば様がお祈り下さる。

「何事もしろしめす愛するお父様。何事も御心のままに運ばせ給うが故にもう何事も申上げず、御心のままになさしめ給えとねがい奉ります。どうぞ、御兩人の上は何事にも堪え得る強き力を与え給え。どうぞ、終りの日まで強く強く御心のままに歩み行くを得しめ給え。多くの祈と共にクリストの御名に於て願上奉ります。」

おば様は僕に「有難うございます」と仰しゃって下さった。けれども、お礼を若し申上ぐるとすれば夫は僕の申上ぐ可き事で、かくの如きよき祈祷に接して心よりのお祈に接してお顔を仰ぐ事も出来なかった。

伺つてよかつたと思う。うがいをさせて頂いてお茶を頂いて、

「どうぞ嘉代ちゃん御機嫌よう」

と申上げ、

「どうぞお身体をお大事に」

と深い御注意をうけ、お玄関に出る。

「どうぞ是非度々来てくださいよ」

とおば様が仰しやる。

「どうぞ伺わせて下さいませ」

とお願いする。

本箱から カーライル Carlyle の Oliver Cromwell's Letters and Speeches 「オリバー・クロムウェルの手紙と演説」を選び、おば様の御署名を願う。

嘉代ちゃんとおば様とは終点まで送つて頂いた。本当に伺つてよかつた。僕等が中央亭



で会う事を神田川で会おうと覚え違いをなさって、神田川へ僕等が行ったら電話でお祈の相談をしようといつていらした相である。本当に伺ってよかった。

沼津に行く事について

「若し佐伯さんと一緒になら非常に安心する」

と仰しかった。僕も

「二人で行くかい」

といわれた母様のお辞を思い出した。頼んで見ようかという気になった。中央郵便局へ行って速達書留をおば様に書く。

「百八円の方はどうか準備が出来ました。が沼津へ行く旅費が足りません。何彼と合わせて百円程頂きとう有ります。それから学校中ではありますが、どうぞ佐伯の行きます事をお許し下さいませんか。佐伯は金のある筈はありませんから、合計百五十円程お貸し頂きとう存じます。御不本意を願って居るのかも知れませんが、どうぞ曲げてお許し下さいまし」
とお願する。

昼、赤尾さんと石□とから僕の送別会話があつたけれども断つた。何とも致方なし。夜、中央亭へ行く。十拳君に会った。愛す可き人よ、何となしに今夜は元気がなく見える。「君お祈りしているのかい」と聞いた。あとから「君運動し給いね」といった。「馬鹿に大人げて僕を子供扱いにするね」と十拳君は笑った。しかし、のんきにして居る可き時ではないと僕は思うからである。加藤と二人で何とはなしに夕食を一緒にした。ありのままをいつて食事はうまかったがその他には何ものもなきテーブルであつた。

8時、西片町へ電話をかけた。佐伯さんと呼び正門前で僕を待つて貰う。グラウンドに出て今日あつたままを話した。話半に9時が来る。おそらくは一緒に祈る事の出来る最後の9時と思つて簡単ではあつたが彼女のためを思う心配のお祈をした。話をすまして

「若しおば様がお許し下さったら、僕と一緒に旅行に行つて呉れないか」と頼む。それは承知したが、泣いて泣いて仕方がない。

「御心を知らしめ給え」

それが凡ての祈であつた。

「僕がそれ丈に堪えているのだけ、泣かないで呉れ給えよ」
漸く泣きやんだ。

西片町へ伺う。おじ様は御来客中であつたのでおば様に丈お願する。おば様は「よろしい」と仰しやる。白山下で別れた。

○1919年11月20日(木)

今日が其の日(結婚式?)である。お昼12時半、1時丸の内の芝生に立つて本当に祈る。



深き御恩恵を与え給えと。

夜、西片町へ行く。おじ様の人間の憐れさにつくづく愛憎がつかたというのがありのまの事実である。大事な大事な事をかく見られて残念である。但し一人行く事はお許しになる。

夜、昨夜書かれた嘉代ちゃんの深いお祈が来る。しっかりと歩いて下さい。

○1919年11月21日（金）

高島さんのおば様に書く。

「どうぞ、ままだとは申し上げます。おば様と申し上げる事をお許し下さいまし。又、嘉代ちゃんの事も聖なる聖なる御心よりお目にかかる事、口をきく事は出来なくとも、離れて祈る許されたる妹と思うをお許し下さい。僕に祈る可くあずけられた妹と思う丈はお許し下さいませんか。おば様にお目にかかる毎も嘉代ちゃんの嘉の字もいわないでいたり、涙ぐんでしまう事は僕の堪ゆる所ではございません」と申上げる。

浅野さん、寅井先生、齋藤さん、お暇乞。麻布最後。よき一年を願う。尾田さんにお礼。寒くなった。鳩山先生は廻るをよして帰る。

西片町では又僕をやるなど仰しやる相である。僕、母様に申上げる。

「母様方は今どんな悪事をしようとしていらっしゃるのか御存知ないのですよ。人を愛せんとする僕の心に少しでも疑をおこさせたらそれでおしまいですよ」と申上げる。

○1919年11月22日（土）

朝、又西片町へ行く。遺例なお話を繰り返しにである。母様とおば様との御相談の上でという事になる。僕は行くときめた。

お昼までに役所の用事すつかりすんだ。諸井も来て呉れた。最後の仕事はおば様にへモグロビン薬のお礼を書くことであつた。Good last workであつた。十拳君に一寸会う。佐々木さんは足尾へ出張中。丸善と三越とで買物をして頭を刈って帰る。

夜、中名生さんへお礼。東中野ではEnoch^{エノク}のお話。……〔講義要旨の英文省略〕……おば様が池におつこちになったと伺つて驚く。ままだである。

佐伯さんから何も云わぬといつて来る。

○1919年11月23日（日）

荷物を作るに午前中かかってしまった。全くやつかいである。飯田町から先きに出して大手町へ行く。内村先生「十誠第十条」……〔講義要旨の英文省略〕……



まま様、母様、敦さん、磯雄さんに送られてお祈をまま様をお願いして沼津に来た。
千本浜の仙松閣である。例の六畳の離れである。

○帰る前の夜、帰る朝(11月29日(土))

ここに来て随分多くの手紙を書いた。よき手紙が沢山ある。心の奥の奥までを書いた手紙はみんなまま様にさし上げた。何時か皆こうさせて頂くより致方がない。今それを片端から書こうというのは無理である。悉くを六本だか七本だかの手紙の中にこめてかく。

涙がつきず流れた六日であった。御心のままならしめ給えと祈りに祈った七日であった。星の黙示に驚きし七日であった。太陽もある事を語って呉れた。海も山もある事を語って呉れた。本当に朝も夜も昼も夕も祈った。歌った。一生忘れられないよきこの本当の意味に於て恵まれた七日であった。

苦しみの中によき主にある友人を一人ました。まま様がそれである。本当に有難かった。まま様なかりせば、佐伯との関係が今日の僕の心配するような事の起ころうとする時、如何にしてすぐ事が出来たであろう。母もおばも頼りに足らざるを知りし時、本当に若しまま様微りせば如何にして心の底の底までを語る事が出来たであろうか。ふいてもふいても湧いて来る涙をどうする事が出来たであろうか。神さまは本当に僕を苦しめ給うた。しかしここに本当によきガイドを与え給うた。

どうしてこんなに僕を苦しめ給いしか。御心の深きを推し量る事は出来ないけれども、何か僕にさせ給う事又は事実らしい。それを一生の頼みに僕は生きて行く。

智もすてた。

意もすてた。

もうすつ可きものはなく、残れるものは皆彼のものと思った。

その中にも聖なる聖なるものがあつた。

此の世のものであるが彼のものと思つていた。彼はそれをも捨てよと要求し給いしがこの六十日であつた。而してついに奪い去り給うた。流るる涙は其のためである。しかも、是を以て彼は僕を本当に生かしめ給うた。

彼と一緒になつてもう世は惜しくない。世行く可き所へ行け。さよなら。

失いしと思ひしもの悉くを悉くに更に加えたるものを彼は与え給うた。

僕自らも清まつた。

嘉代ちゃんも清まつた。

清められたる兄妹である。

天も祈れ

海も祈れ

山も祈れ



渚も祈れ

而して凡ては我がために心から祈って呉れた。

小鳥も祈って呉れた

波の音も祈って呉れた

日も祈って呉れた

星も祈って呉れた

祈って呉れないものは彼を知らぬ人のみである。

祈を体験しつつ、涙は、人の涙は

彼の涙に変わろうとする

苦しくも忍べよ

我又忍ぶ

といわれる。涙が悦となる

祝す可き一週間よ

汝は実に御恩恵そのものであつた

示されたる道をいざ歩かん哉

凱旋はいわずと知れた事

今ぞ凱旋の序曲を奏せん哉

彼の御名を讃美し捧げん。

○1919年11月24日(月) 28日(金)

〔記載なし〕

○1919年11月29日(土)

帰京。藤井先生。西大久保、西片町。

○1919年11月30日(日)

中渋谷。内村先生。東京駅。

悦につけ愁につけ神に御前にひれ伏す時

彼も彼所に御恩恵深く祈りつつ

大いなる日を待ち給えるを讃めさせ給え。

祈らんのみ

祈らんのみ

苦しみける本当に頭を悩ましける四十五日なりし哉

涙を流しける五日なりし哉

心より祈り祈りし十日なりし哉
祝す可き六十日よ

実に祝す可き六十日よ

過去25年の歴史に於て最めざましき彼の愛を示したるこの六十日にすぐる時にはない。
9月の末——10月の始にはじまりし六十日は今日11月30日を以て終らざるを得ない。

東京駅のお別れよ

本当に嘉代ちゃん

Christian dignity〔威厳〕と Christian humility〔謙遜〕との間を

強く立ち

人を愛し

御名をたたえて歩いて下さい。

政美も同じ道を歩きます。

苦しい事は六十日でわかりました。

先き何十年が苦しい事か判りません。

しかし有難い事も六十日でわかりました。

先き何十年はどんなに悦の年月であろうか判りません。

悦は苦に勝ちました。

まま様のお祈

彼御自身のお祈

を忘れる事は出来ません

どうぞしつかり歩いて下さい

彼の御下まで歩いて下さい

政美も一生懸命御恩恵の下に

おみちびきの下に歩いて行きます。

ありがとうございます

ありがとうございます

本当にしつかり参りましょうよ

神様

あなたの御跡したわんとする二人と

そのために祈れるまま様とを恵み熱め給え

アーメン

踏みまよわんとする

僕の心に一番心配を与うる



佐伯さんを御恩恵給え
おみきさんを御恩恵給え
御名のままに歩き来りし彼等を
結局御名のまま歩きしめ給え
尊き御名に於て

アーメン

栗屋を導き給え
彼の心にすきを起こさしめ給わざれ
歩む可き道を歩かしめ給え
大いなる子供を育て給え
主の御名に於て

アーメン

武緒君をめぐみ給え
ここに健康を与え給い
ここに熱心なる友人を与え給え
彼よりやや感情的なる調子をとり去り給え
強き温き人たらしめ給え
御名によりて祈る

アーメン

母のため、おばのため、弟妹のため、
先生のため、友人のため
心より御恩恵と御導きの玆に
明確ならん事を願ひ奉ります

アーメン

よき六十日を終えて
よき一年を迎えしめ給え
赤坂にも 和田塚にも 中渋谷にも
戦ある毎に凱歌をあげしめ給え
只 主の御名のみあげしめ給え
人の名のあがる事なく
只御名のみあがらしめ給え
主よこの切なる尊き祈を助け給いて
父の上におそなえ下さいまし

アーメン